

対立をこえるための公民科授業の構想

－ 哲学の自然主義的転回をふまえた公民科授業への「感情」の導入 －

阿部 哲久

神経科学・認知科学など自然科学の成果を取り込む哲学の自然主義的転回とよばれる研究の広がりにより、人間の価値判断や意思決定に関して新たな知見が得られるようになってきている。これらの知見は現在の世界を覆う様々な対立についても解決に向けた示唆を与えてくれるものである。この知見に基づき「感情」の問題を公民科の授業に取り入れ、価値判断を行わせる授業を構想し実践研究を行った。その結果、価値認識を成長させる授業への新たな示唆が得られた。

1 問題の所在

ポピュリズムが世界を覆っているといわれる。米大統領選挙でのトランプ現象、欧州諸国でのポピュリズム政党の躍進など、ポピュリズムと呼ばれる現象は、特定の主張と結びつけて民主主義の危機として語られることも多い。しかし水島は、ポピュリズムと呼ばれる現象そのものは、民衆の直接参加を通じた改革の試みと言う面があり、デモクラシーの脅威となるだけでなくデモクラシーに寄与する可能性もあることを指摘している⁽¹⁾。むしろ近年の政治的対立で気がかりなのは、ポピュリズムの特徴として懸念されている、自分たちと異なる意見を価値のないものと決めつけたり、異なる意見の持ち主に愚者、悪の実行者とレッテルを貼ったりするような主張の仕方が、従来多様性尊重等を掲げてきたグループなど主張に関わらず広がってきているように見えることである。

このような冷静さを欠いた対立の広がり背景にあるのは何だろうか。ジョシュア・グリーンは、人間の道徳心が論理的な思考だけでは無くむしろ本来的には感情や直感に依存していることが、世界を覆う対立の背景にあると指摘する⁽²⁾。近年、グリーンのような、心理学、神経科学などの自然科学分野とも連携しfMRI等も用いて哲学的な問題に取り組むアプローチは「自然主義的転回」と呼ばれ、構築主義をはじめとするポストモダンに代わる新たな思想の一つとして注目されている⁽³⁾。そしてこれらの研究によって、価値判断には、論理的な思考だけでなく、本能的な感情に根差したメカニズムも影響して

いることが明らかにされてきた。わが国でも心理学者の亀田達也らによって、人文学・社会科学で蓄積されてきた規範的理論（「あるべき行為・社会とは何か」に関する論考）と、人間の社会的認知・行動に関する記述的（「～である」）理論とを結びつける研究が進められており⁽⁴⁾ロールズの格差原理に該当する判断のメカニズムが人間に元々存在していることなどが明らかにされている⁽⁵⁾。

民主的、平和的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養うことを目標とする公民科の授業⁽⁶⁾において、今日の社会に広がる対立をこえることができる社会の形成者を育成するためには、対立の根底にある我々の価値判断についての理解を深め、自然主義的転回にもとづく新たな知見を取り入れ、学習の対象として「感情」をどう取り扱うか検討する必要があるのではないかと考える。筆者は昨年グリーンの研究をベースとした授業実践を行ったが、価値判断と感情の関わりを知識として扱う授業に留まったものであった⁽⁷⁾。そこで今年度は、知識として感情の問題を扱うと同時に価値判断場面においても感情の問題を意識させることができる授業を構想し実践研究を行った。

2 授業の構想

本授業は、公民教育学会研究プロジェクトにおける「持続可能な開発と地球温暖化」グループの授業実践として「リサイクル」を題材にし「発達段階による授業内容の深化」という課題にそって構想したものである。研究プロジェクトの主旨に沿い、中学

校段階では、環境経済学の研究成果に基づいて法的強制力やインセンティブを利用した仕組みづくりがリサイクルを進める上で必要であることを理解させる授業を実施することを前提に高等学校段階での授業を構想した。高校段階では、法制度やインセンティブがあって初めてリサイクルが成り立つことに加えて、それをうまく成り立たせるためには、囚人のジレンマや、民主的決定に参加できないという世代間の問題など「システムに関わる難しさ」があることを理解させること。さらに「感情に関わる難しさ」も存在すること、として課題として「感情」を扱い、リサイクルには「困難さ」があるが、それを「乗り越える必要性」がわかることを目指した授業を構想した。また、課題として感情を扱うだけでは無く、授業の中の価値判断場面において、参照させる価値規準として「功利主義」や「自由主義」などの規範的理論に基づくものだけではなく、直観的判断に基づくと考えられる「本質主義」を含めることによって、自分たちの価値判断にも「感情」が影響を与えていることを認識させることを意図した。

3 授業実践 (学習指導案)

日時 2016年6月28日(火)第6限
7月4日(月)第6限

場所 第1社会科教室

学年 高等学校2学年政治・経済選択クラス 計40名(男子17名,女子23名)

題目 「リサイクルから考える持続可能な社会」

目標

- ・ リサイクルを経済学的に捉えるだけでなく、感情との関係で分析させ、法制度やインセンティブがあって初めてリサイクルは成り立つが、それに加えて、「システムに関わる難しさ」「感情に関わる難しさ」があることを理解させる。
- ・ リサイクルには「困難さ」があるが、それを「乗り越える必要性」があることを理解させる。
- ・ 自分たちの価値判断にも「感情」が影響を与えていることに気づかせ、より良い価値判断ができるようにさせる。

題材設定の理由

①環境問題のとらえ方

環境問題の解決は重要であると社会的には合意が形成されているように見える一方で、実際の問題解決に於いては順調に進んでいるとは言い難い。資源の利用は「便益」をもたらす、同時にその利用は「費用」をもたらす。そのため、自由放任では「費用」を忘れ使用が過剰になってしまう。これが環境

問題である。この場合、過剰な使用を押さえるなんらかの社会的規制が必要になるか、あるいは、当事者同士の話し合いが可能であるなら、金銭取引が可能であれば市場的に解決出来ることが環境経済学によって明らかにされている⁽⁸⁾。問題解決の方法は示されているように見えるのに困難に直面しているのはなぜだろうか。

②システムに関わる困難さ

環境問題は、「費用」と「便益」をめぐる判断基準の問題にとどまるものではない。当事者同士の利害調整をめぐる「囚人のジレンマ」の状況や、合意形成にあたって被害を受ける側の将来世代が意思決定に参加できないといった「当事者の不在」など、利害調整や、合意形成(利害調整の手続き)をめぐる対立が問題を難しくしている⁽⁸⁾。これらはいわば環境問題をめぐる「システムに関わる困難さ」と言えるであろう。

③感情に関わる困難さ

生徒はリサイクルの意義を知識としては理解していると考えられる。しかし知識として理解できることと行動にうつすことができることは別の問題である。実際に篠木らによる仙台市で行われた調査では、リサイクルの意義を理解しているものの実行していない人が多く存在している⁽⁹⁾。篠木は調査結果の分析によって「リサイクルの意義の理解」と「リサイクルの不実行」という認知的不協和に対して四通りの正当化が行われていることを明らかにしている。知識として意義を理解していたとしても、「したくない」という感情・直感との矛盾が生じたとき、理性は自らの直感を正当化するために機能してしまう。環境問題のような利害の対立が存在する問題ではこのような「感情に関わる困難さ」も抱えている。自らの(価値)判断基準を客観的に見つめさせる、感情をめぐる問題にまで踏み込んだ授業を行う必要があると考える。

④感情は問題か

一方で、感情・直感は社会的に有用であることも指摘されていることは重要である。山岸らは社会心理学の研究によって、「囚人のジレンマ」の状況下で、合理的で無いにも関わらず協力をする人が半数を超えるということを明らかにしている⁽¹⁰⁾。また、グリーンはトロッコ問題を用いた実験などによって、人間には「私たち」のために「私」を犠牲にする感情のメカニズムが備わっていることを明らかにしている。例えばシリア難民の子どもの写真が世界を動かしたように「私たち」のこととして感情が駆動されることが意味を持つことはある。しかしグリーンは同時に「私たち」のために駆動するメカニ

ズムが「彼ら」との間では働かないことも指摘している。彼は、災害被災者を助ける規準として最も高い相関があったのは物理的距離であったことや、社会的な紛争が「彼ら」と「私たち」の間の問題という性質を持っていることを指摘している。現代の社会を覆う問題の多くの基底にあるのもこのような「感情に関わる困難さ」なのではないか。なお、グリーンは私たちの道徳的直感が二つの異なるモードを持ち、時間がかかるが「彼ら」のことを考えることのできる道徳的判断（例えば功利主義）も持っていることを示して、そこに問題解決の可能性があると指摘している⁽²⁾。

⑤感情をどう捉えるか

このように、感情は時に協力もさせ、一方で自分勝手な正当化の原動力にもなる。例えば「システムに関わる困難さ」においても、ジレンマにはプラスに、当事者不在にはマイナスに働く可能性がある。いずれにしても我々は意思決定において、感情からまったく離れて合理的な判断を行うことが困難であることは明らかである。ターナーは、「感情は社会によって構築される」と考えることは有用であるとしながらも、「合理性と感情は、あらゆる水準で複雑に関連しており、合理性と感情を分析的に分離することが有効であると見なすことはできない。」と指摘している⁽¹¹⁾。これは篠木やグリーンへの指摘とも符合する。「システムに関わる困難さ」と「感情に関わる困難さ」を持つ問題を解決していくためには、自分の判断の理由についても、合理的な根拠にとどまらず、どのような感情に基づいていたか認識できることが求められる。しかし、多くの場合感情は意識的な気づきの水準下において意思決定や価値判断に影響を与えている。そのことを意識できるような価値判断場面を用意し、メタ認知的問いかけを行うことが必要であろう。

⑥持続可能な開発の価値規準

持続可能な開発をめぐる議論が難しいことの原因として、価値判断の基準が見えにくいことが上げられる。「持続可能な開発」は、前述の通り”民主的手続きが機能しない”という点からは、少数者の意見をどう取り上げるかという「公正」の問題であると理解されがちであるが、本質的には”現代世代も将来世代も平等であるならより多くの（無限に続く）将来世代の幸福のために現代世代は制約を受け入れるべきである”という、「功利主義」的な価値をより重視した概念であると見なすことができる。（先進国途上国関係に置き換えても少数の先進国民が優先され、功利主義が実現していない状況とみなすことができよう。）実際に、日本赤十字社医療セ

ンターの國頭英夫によれば、アメリカでは持続可能な医療制度のために一定の条件の下で現代世代の医療への制約を課すという議論が行われているという⁽¹²⁾。しかしリサイクルやCO₂排出制限に賛成の人は、果たしてこの医療の事例に無条件で賛成するであろうか。いわゆる「トロッコ問題」と「ファットマン問題」で多くの人の判断が変わってしまうような、グリーンが言う二つの道徳的判断モードがまさに錯綜する問題が、持続可能な社会をめぐる問題なのではないか。これは、価値判断にあたって無意識にいずれかの価値を選択している生徒にとっても、自らの価値判断を批判的に吟味させるのに適した題材であるということを示している。自分の判断基準が、何らかの価値に基づくものなのか、自分の感情はその判断にどのような影響を与えているのか、といった視点でも自分の価値判断を吟味させることができると考えられよう。本授業ではリサイクルの困難さについての科学的認識を獲得させ、感情という視点を与えた後に、「将来世代のために現代世代は制約を受け入れるべきか」と問い、他者とも吟味し合わせることを通して、生徒の価値認識の成長につなげたいと考えた。

⑦価値判断の基準を考える枠組み

生徒に価値判断の基準を考えさせる上で、どのような価値を枠組みとして示すかは、生徒の価値判断の質を高める上で重要である⁽¹³⁾。では将来世代のために現代世代が制約を受けることを「功利主義」にもとづくと捉えた場合に、現代世代の制約に消極的な立場はどのような価値に基づくといえるであろうか。まずは功利主義に抵抗を示す直感・感情が、道徳的な価値を持つものなのか、単に利己主義に基づくものなのかを吟味することが必要である。単に「将来世代のために現代世代は制約を受け入れるべきか」と問うだけでは「認知的不協和に対する正当化」の訓練をすることになってしまうであろう。「価値」学習についての先行研究では「功利主義」と「公正としての正義」を対立軸としたものなど、価値判断の一方の極として「公正としての正義」を扱っているものが多い⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾。本授業においても、制約によって不利益を受けるような弱者を例示することは可能ではあるが、かなり限定的であるようにも思える。先にあげた医療の例では、直感的に功利主義におかしさを感じるのは確かであるが、この違和感は「公正としての正義」によるというよりは、まさにグリーンが指摘するような道徳的直感、感情によるものではないだろうか。我々が「人間そのもの」に価値を見出しているということに由来するものであならばこれは「本質主義」にもとづいている

と考えるべきである。

⑧公共政策規範の理論

以上のことをうまく説明でき、価値判断の基準を示すことが出来る理論として、公共政策学における公共政策規範の理論がある。公共政策規範の理論では「自由主義」「功利主義」「本質主義」が価値選択の枠組み（規範）としてあげられている。自由主義、功利主義に加えて、現実の合意形成場面でしばしば登場し（道徳的直感にもとづいて）我々の判断に影響を与えるにもかかわらず「自由主義にも功利主義にも評価できない」価値規範として本質主義（人間や文化、自然といったものに内在的価値を認める立場）をあげていることが特徴である⁽¹⁵⁾。これは本授業の意図する直感・感情に基づく価値判断を明示するという意図とも整合するものである。また、公共政策学における規範理論の特徴として、倫理学と異なり「根本的価値」「大統一理論」を探求するわけでは無いこと、政治哲学・法哲学と異なり「規範それ自体」のみならずその使用方法にも関心を寄せていること、などがあげられる。現実の問題に対峙するためのこれらの特徴も公民科授業のねらいと整合していると考えられる。

⑨価値判断

上記の理由から本授業では公共政策規範の理論の分類をもとに、生徒に自分の考えを吟味させることとした。なお、この分類では、ロールズは現代的自由主義として自由主義に含まれている。自由主義の中に古典的自由主義から今日において大きく変容した現代的自由主義までが含まれている点については、公民科の授業としてはこれを分けて考えさせることも必要である。さらに通常規範とならない立場としてまず棄却される利己主義と相対主義について、生徒の中には直感・感情としてこれらを選択している生徒もいる可能性があることから、「認知的不協和に対する正当化」を防ぐため、授業ではあえてこれらの基準も例示し、棄却する旨を示すこととした。

その上で、功利主義に支えられる持続可能性と言う価値が、どのような場合に制約を受けるのか、その条件を考えさせ、その条件がどのような自分自身の感覚（感情・直感）に支えられているのかを自覚的に考えさせるとともに、リサイクルを感情との関係で分析し、困難さを乗り越えて持続可能な社会を実現する方法について考えさせることとした。

学習指導過程

	発問・教師の働きかけ	生徒の活動・獲得させたい知識
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・リサイクルをしているか ・リサイクルは進んでいるのか ・リサイクルは必要なのか ◎環境問題の解決はなぜ難しいのか？	(事前に家庭でリサイクルをしているか等のアンケート(仙台市に準じたもの)を実施し集計しておく) <ul style="list-style-type: none"> ・様々な壁にぶつかっている ・慎重な意見もあるが、それらの意見への反論もなされており、環境問題の解決につながる方法の一つとして進められている。
展開1	①環境問題を定義する。 <ul style="list-style-type: none"> ・環境問題とはどんなものか。定義しよう。 ○費用と便益のバランスはどうすればとれるか	<ul style="list-style-type: none"> ・資源の利用は便益をもたらす 同時にその利用は費用をもたらす 自由放任では費用を忘れ過剰になる ○規制を行う。 ○当事者同士の話し合いが可能で、金銭取引が可能なものであれば市場的に解決出来るとされる。
展開2	②システムに関わる難しさを考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・環境問題について思考実験をしてみよう。 A, あなたは自分の部屋にゴミを捨てているとする。どこまで汚して良いだろうか。 B, 他人と同居している部屋をどこまで汚して良いだろうか。 C, Bにおける両者による利害調整のルール設定はどうあるべきだろうか。 ○費用と便益の最適化以外にどんな問題があるか	= 得られる満足(便益)と、汚れによる不快(費用)という、費用と便益のバランスの問題である(社会的最適利用の問題) = 便益を得る人と費用を負担する人の間の利害をどう調整し望ましい状態を実現するかという問題である(社会的最適性の実現の問題) = 利害調整の手続きの方法について社会構成員の意見を集約する方法の問題である(合意形成の問題) ①の規制や市場は合意形成の結果として選択される。 ○みんなのためになるとわかっているが協力できない場面がある(四人のジレンマ) ○将来世代のような、合意形成の場面に参加できないプレイヤーはどうするかという問題がある(当事者の不在)

<p>展開3</p>	<p>③感情に関わる難しさを考える。 ・仙台市で行われたリサイクルに関わる意識と行動のアンケート結果のデータを提示する。</p> <p>○リサイクルに協力しているのはどれくらいの割合か。 ○協力を増やすにはどうすればよいか。 ○リサイクルに協力していないのは意識が低いからか。</p> <p>○なぜ意義を理解しているのに行動しないのか。</p> <p>○リサイクルの意義を評価していても非協力的なのはなぜか。</p>	<p>(自分たちの事前アンケート結果も適宜活用し、事前に自分は行動しているか、意識と行動の矛盾はないかを問い、四つの正当化戦略に該当する意見も出せると良い)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・約半数 ・意識を高める、情報提供する 等 <p>○リサイクルの意義を認めているのに行動していない人がいる。(意識を高めるだけでは不十分?)</p> <p>○次のような正当化が行われている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行動窮化戦略(リサイクルは意味が無いと考える) ・合理化戦略(自分だけやっても意味が無いと考える) ・コスト戦略(手間がかかりすぎると考える) ・注意変更戦略(高齢な家族には困難など、別のより重要な価値があると考える) <p>○リサイクルは良いことという認識と「やりたくない」という直感とが矛盾し「認知的不協和」が生じたため、その解消のための正当化が行われたと考えられる。</p> <p>注意変更戦略については、実際に別の価値の方を重視している可能性もある。</p>
<p>展開4</p>	<p>④感情と理性の可能性と限界について考える</p> <p>○感情の克服が問題解決への道か。 ○理性的、合理的であれば正当化を克服できるとして、では四人のジレンマは解決できるか。</p> <p>○感情が駆動されて社会的に良い行動が選択された例はあるか。</p> <p>○感情の駆動に問題はないか。</p> <p>○環境問題おける問題は何か。</p> <p>◎環境問題の解決はなぜ難しいのか?</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・理性的であるべきだ、克服は無理だ 等 <p>○「四人のジレンマ」は合理的であるがゆえに協力できないはずである。</p> <p>○しかし心理学者による実際の実験では協力する(仲間のために不合理な行動をする)人が半数程度はいる。</p> <p>○人間は直感・感情によって個人には不合理でも社会のためには理性より良い選択をすることがある。(「四人のジレンマ」には正の影響が考えられる)</p> <p>○2015年にヨーロッパではシリア難民の少年の写真が報じられたことで世界が動いた。(私たちの問題だという感情に訴えたのではないか)</p> <p>○先に見たような非協力の正当化につながる。</p> <p>○「私たち」のためには駆動するが仲間では無い「彼ら」と認識した場合は動かない。しかもその境界は非常に曖昧である。グリーンによれば災害被災者を助ける規準は物理的距離であったという。</p> <p>(「私たち」と「彼ら」で変わる感情は、社会の様々な紛争の原因でもありと考えられることをおさえる)</p> <p>○「私たち」と共感しにくい将来世代や、情報の少ない遠く離れた地域のためには駆動しにくい。(「当事者不在の問題」には負の影響が考えられる。)</p> <p>○「システムに関わる困難さ」と「感情に関わる困難さ」を抱えているからではないか。</p>
<p>展開5</p>	<p>⑤価値判断</p> <p>○環境問題には二つの困難さがあることをふまえて「将来世代のために現代世代は制約を受け入れるべきか」考えてみよう</p> <p>○プリントに沿って自分の意見をまとめてみよう</p> <p>○どのような価値の対立だと言えるか ○持続可能と言う考え方は何を重視しているのか ○他にはどんな立場があるのか</p> <p>○自分の判断基準について4人グループで意見を交換しよう。 ○整理してみよう。将来世代のためにどこまで犠牲にできるだろうか、功利主義が制約を受けるのはどんな時だと思うか、それは論理的に導かれたものか、どの部分が自分自身の感覚・直感によるものか明らかにして書こう。 ○もう一度4人グループで意見を交換しよう。</p> <p>○全体で意見を交換しよう。</p>	<p>(プリントに判断の根拠となる価値として、どのような価値を重視したか記入させる(個人))</p> <p>○自分だけではなく将来世代や世界の人々を考えるのは功利主義である</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自由主義(古典的・現代的) ・本質主義 ・利己主義・相対主義 <p>(まず利己主義・相対主義は棄却することを伝え、各立場の例を示して考えやすくさせる)</p> <p>(自分の考えを伝えあい異なる意見に触れさせる(グループ))</p> <p>(医療の例を提示し、どのような条件の下で判断が変わるかを考えさせる(個人)。その際、どのような「価値」を重視したのかを考えさせるとともに判断に影響を与えている自分の感情や道徳的直感について意識させる)</p> <p>(自分の意見の元になっている感覚を伝えあい異なる感覚に触れさせる(グループ))</p> <p>(グループ討論の中身を発表させる)</p>
<p>終結</p>	<p>○授業の最初に扱ったように、様々な問題もありつつリサイクルを進めることには意義があるとするとするなら、「リサイクルをさらに進めるためにはどうすれば良いだろうか」今日の授業をふまえて、政策立案者になったつもりで考えて提案してください。</p>	<p>(理由を明確にして提案を考えさせる)</p>

4 実践結果の分析

上記指導案の通り授業を実践した。評価および分析は、授業前に実施したアンケート、授業時に記入したプリントに加え、授業1週間後の定期試験で、授業で扱った価値判断の基準および、リサイクルに関わる問いを出題し、その結果をもとに行った。

日程の都合もあり、2時間構成で実施したため、かなり早足での授業展開となり、一部の内容（感情に関わるジョシュア・グリーン理論等）を過去に一度学習していたとはいえ、思考の前提となる知識の理解に十分な時間をかけることが出来なかったのは反省点であった。特にシステムに関わる難しさについては具体的な課題などを提示して考える時間をとる必要があったと考えられる。実際に、知識を確認する内容の空欄補充と単文による語句説明を求めた記憶再生型の問題の正答率は50%以下に留まった。一方で、小論文形式で出題した「価値判断」に関わる問いでは、ほとんどの生徒が授業の中で扱った価値判断基準に基づいて「持続可能な開発」の問題をとらえて表現することができており、全員が5段階評価の3以上（平均4.3）に達していた。

中学校での実践との相違を比較検討する目的でリサイクルについて聞いた問い（リサイクルについてあなたはどのように考えているか、現在の問題点をあげて自分の考えを300字以内で書きなさい。）の答えを分類したものが図1である。

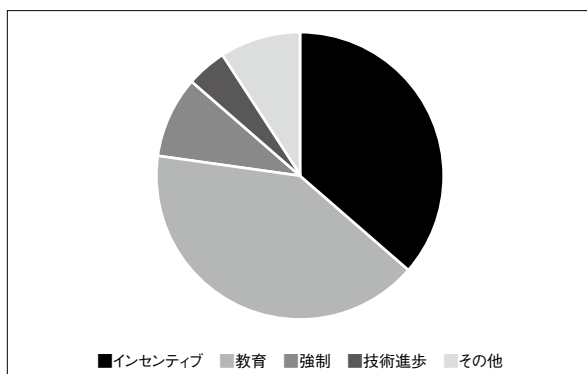


図1 リサイクルを進めるために必要だと考える政策

経済的なものだけではなく利便性の向上など広義のインセンティブ政策も「インセンティブ」に分類し、「教育」については学校教育の他に啓蒙活動などをふくめて分類している。

記述内容を分析したところ、インセンティブや規制、教育といった提案をするだけの文章に留まっているものがほとんどで価値判断と結びつけた解答はほとんど見られず、高校で新たにみつかった「感

情」や「価値」がどのように影響を与えたかを解答の分析から直接明らかにすることはできなかった。段階的に問う、解答方法に条件をつけるなど、問題の問い方・構成に工夫が必要であった。

一方でいくつかの興味深い発見もあった。「感情」というコントロールが難しいものについて扱ったにも関わらず、「インセンティブ」と並んで「教育」をあげた生徒が多く、「法的強制力」をあげた生徒が少なかったことはその一つである。この点の解釈については次の問いとも関わるため後述する。

なお、授業内容に関係なく自己の信念で答えた可能性もあるため、授業前のアンケートでリサイクルを進める方法として答えていた内容と比較したものが表1である。いずれの選択肢でも約半数の生徒が授業前と異なる判断をしており、最終的な判断と授業内容には何らかの関係があると考えてよいであろう。

表1 授業前の選択との比較

		授業前				
		インセンティブ	教育	強制	技術進歩	その他
授業後	インセンティブ	3	4	1	1	3
	教育	3	6	1	0	1
	強制	0	0	0	0	0
	技術進歩	0	1	0	0	0
	その他	3	0	0	0	0

(無回答の生徒が複数いたため総数は他のデータより少ない。)

次に、価値判断に関わる問い（将来世代のために現代世代は制約を受け入れるべきか否か、根拠となる価値を明確にして200字程度で簡潔に書きなさい。）への解答について、生徒がどのような価値を根拠としてあげたかを授業者が抽出し整理したものが図2である。

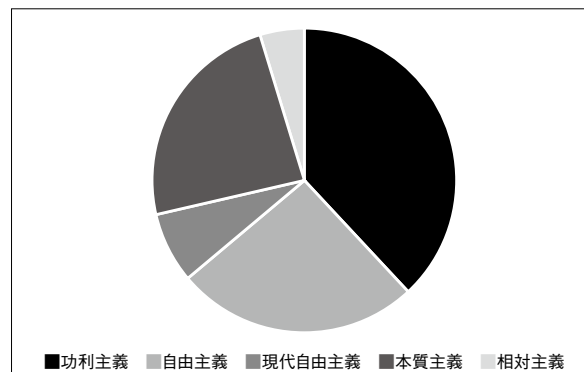


図2 判断の根拠となる価値観

一部には〇〇主義という語句の誤用も見られたため、その場合はどういう価値に基づいているかを授業者が判断して分類した。また、功利主義に基づきつつ自由主義に基づく制約が必要という主張など、複数の価値判断を取り入れている場合はすべてをカウントすることとした。また、危害原理に言及したものは「自由主義」、格差原理にふれたものは「現代的自由主義」として整理した。

結果は功利主義と本質主義がともに多く、加えて条件として危害原理や格差原理に触れる形で自由主義をあげたものが多かった。本質主義については“将来”というそのものに価値があるとする考えや“生命”や“環境”に価値を見出す考えなど価値を

見出す対象は多様であったが、約4分の1（16人）の生徒が本質主義の立場をとっており、注目に値する。価値判断型授業の先行研究では、功利主義や古典的自由主義に相対する立場としてロールズの格差原理に代表される現代的自由主義を提示し価値判断を迫る事例が多く見られ本質主義は積極的に扱われてこなかったように思われるが、今回現代的自由主義に言及した生徒は13%（5人）に留まっている。授業者は現代的自由主義に基づいて考えさせているつもりでありながら、実際には生徒は本質主義で判断していたといった齟齬がなかったか、再検討が必要であることが明らかになったのではないかと考える。

表2 重視する価値観とリサイクルのための政策選択

		持続可能な社会の根拠と考える価値観				
		功利主義	自由主義	現代自由主義	本質主義	相対主義
リサイクル をするため に必要なこと を考えると	インセンティブ	7	7	1	9	0
	教育	12	9	1	3	2
	強制	2	1	1	1	1
	技術進歩	2	0	1	0	0
	その他	2	0	1	3	0
	計	25	17	5	16	3

さらに、持続可能な開発について考える上で重視した価値観と図1で示した政策選択との関係を整理したものが表2である。

本質主義を選んだ生徒に「インセンティブ」をあげたものが多く、功利主義や自由主義を選んだ生徒に「教育」をあげたものが多い傾向が見られることは興味深い。あえて大胆に推測すると、授業を通じて合理主義にもとづいて論理的に導かれる功利主義や自由主義の考え方に気づき持続可能な開発に価値付けを行った生徒は、他の人びとも同様に論理的な説得をすることが可能であると考えて「教育」を、一方で自分の直観の価値を再確認した生徒は直観的に行動する人間を前提として「インセンティブ」を選択した、ということも考えられる。

もちろん全体としてはいずれの価値を重視しているグループでも「インセンティブ」選択者が多いことや、サンプル数が少ないことなど、相関があるとまでは言いきれないデータであり、仮説の域を出ないものであるが、もし相関があるとすれば、生徒は授業を通じて得た知識だけではなく「自分の理解の仕方」を社会問題に関わる人間観に反映して価値判断を行ったことになる。これは従来授業を設計する上であまり意識されてこなかった点ではないか。今後、より詳細な分析が可能な授業プランの作成と実践を行って生徒の価値認識を成長させる授業のあり

方を明らかにしていきたい。

表3 リサイクル実行との関係
リサイクル実行スコア（自己評価4～1）

	3以上	2.5以上	2以上	2未満
功利主義	7	7	1	1
自由主義	4	8	0	1
現代自由主義	2	3	0	0
本質主義	5	8	1	0
相対主義	1	0	0	1
インセンティブ	6	11	0	0
教育	9	7	1	2
強制	3	1	0	0
技術進歩	0	1	0	0
その他	3	1	1	0

表4 環境問題への関心との関係
事前に聞いた環境問題への関心（自己評価4～1）

	4	3	2	1
功利主義	1	10	5	0
自由主義	1	8	0	3
現代自由主義	0	5	0	0
本質主義	3	10	2	0
相対主義	0	1	0	1
インセンティブ	2	11	3	2
教育	0	11	5	3
強制	0	4	0	0
技術進歩	0	1	0	0
その他	2	3	0	0

（関心が高い方が4）

表5 学力考査結果との関係
学力考査平均（得点順に A → E）

	A	B	C	D	E
功利主義	1	5	4	6	2
自由主義	1	2	3	4	3
現代自由主義	1	1	1	1	1
本質主義	1	4	2	3	5
相対主義	0	0	1	0	1
インセンティブ	0	3	4	6	6
教育	2	6	4	7	2
強制	0	1	1	1	1
技術進歩	0	0	1	1	0
その他	1	0	2	1	1

その他の項目についても何らかの傾向が見て取れるか検討するため、授業前に仙台市の調査項目に準じて実施したりサイクルの実行状況のアンケート調査結果、事前アンケートでの環境問題に関心があるかという問いの答え、知識理解の度合いや関心との関係を見るため本授業範囲を含む期末試験の成績を5段階に分類したもの、のそれぞれと政策選択との関係を示したものが表3～5である。学力考査上位層にやや「教育」選択者が多い傾向が見られるものの、概ね全体の分布と似た分布になっており相関の可能性を示すものではないと考える。

5 成果と課題

本授業実践では、社会問題を分析するツールとして「感情」を扱うことに加えて、「感情」「直感」を取り込んだ価値判断の枠組みとして公共政策規範の理論を援用し、感情と論理を相互に行き来する授業を行うことで、「対立をこえる」ための力として、自分たちの価値判断にも「感情」が影響を与えていることに気づき、より良い価値判断ができるようにさせることを意図した。「感情」を扱ったことが価値判断の質をどのように変えたのかを十分明らかにすることはできなかったが、今後の授業改善に向けた示唆を得られたことは成果である。これまで価値判断型授業で提示されてきた価値判断の枠組みの再検討が必要であること、知識内容だけではなく直観的なものを含んだ「生徒自身の理解の仕方」を授業の設計に織り込む必要がある可能性があること、などである。示唆をふまえて実践研究をすすめる、「対立をこえる力」を育成する授業を明らかにしていきたい。

なお、いずれも限られたデータの解釈に依拠しており、より精緻な解釈が可能な授業プランの作成と実践、分析を行うことも課題である。

引用・参考文献

- (1) 水島治郎『ポピュリズムとは何か 民主主義の敵か、改革の希望か』, 中公新書, 2016年, 3-28
- (2) ジョシュア・グリーン, 『モラル・トライブズ - 共存の道徳哲学へ -』, 岩波書店, 2015年
- (3) 岡本裕一朗『いま世界の哲学者が考えていること』, ダイヤモンド社, 2016年, 64-74
- (4) 東京大学大学院人文社会系研究科社会心理学講座 亀田達也研究室 研究内容「正義・社会価値」
<http://www.tatsuyakameda.com/project/project2.html> (閲覧日: 2017年1月16日)
- (5) 亀田達也「第57回日本社会心理学大会シンポジウム発表資料「政治態度や規範の探求をめぐる社会心理学と政治学の対論」, 2016年
http://www.socialpsychology.jp/conf2016/wp-content/uploads/2016JSSP_SympoPoliSciDrKameda.pdf (閲覧日: 2017年1月16日)
- (6) 文部科学省『高等学校学習指導要領 公民編』, 2009年, 4
- (7) 阿部哲久「『政治的教養』の育成をめざした授業の開発」『中等教育研究紀要』Vol.62, 広島大学附属中・高等学校研究紀要, 2015年, 3-10
- (8) 前田 章, 『ゼミナール環境経済学入門』, 日本経済新聞出版社, 2010年
- (9) 篠木幹子, 『環境問題へのアプローチ - ごみ問題における態度と行動の矛盾に関する正当化メカニズム -』, 多賀出版, 2007年
- (10) 山岸俊男, 『社会的ジレンマ - 環境破壊からいじめまで -』, PHP 新書, 2000年
- (11) ジョナサン・H・ターナー, 『感情の社会学理論』, 明石書店, 2013年
- (12) 國頭英夫インタビュー記事「コストを語らずにきた代償“絶望”的状况を迎え、われわれはどう振る舞うべきか」週刊医学界新聞 第3165号, 医学書院, 2016年3月7日
http://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?id=PA03165_01 (閲覧日: 2017年1月16日)
- (13) 大杉昭英, 「社会科における価値学習の可能性」『社会科研究』Vol.75. 全国社会科教育学会, 2011年, 1-10
- (14) 佐長健司「社会科授業における価値判断指導の検討」『社会科研究』Vol.65, 全国社会科教育学会, 2006年, 41-50
- (15) 佐野 亘, 『公共政策規範 (BASIC 公共政策学)』, ミネルヴァ書房, 2010年

註

本稿は、公民教育学会研究プロジェクト（平成26～28年 科学研究費補助金事業基盤研究（B）「現代社会の課題を考察する見方や考え方を身に付けさせる公民教育カリキュラムの再構築」代表者 唐木清志）における「持続可能な開発と地球温暖化」グループの高校段階での授業実践として構想し実施され、研究プロジェクト報告書でも一部報告を行っている授業について詳述したものである。